

名古屋港管理組合11月定例会（11月14日） 速記録（未定稿）

◎高木ひろし議員

議長のお許しをいただきましたので、通告に従い、私からは、中川運河を含みます名古屋港管理組合所管区域内における水上スポーツの振興についてお伺いしてまいります。

突然ですが、滝廉太郎という有名な作曲家がおりまして、明治時代に作曲した曲に花という歌がございます。

♪春のうら～らの～と、こう始まる歌でございまして、よく耳になじみのある曲だと思いますが、この歌はこう続きます。

春のうららの隅田川
上り下りの船人が
權の滴も花と散る
眺めを何にたとふべき

ここに歌われておりますのは、隅田川の春の風物詩であります早慶レガッタ、つまり早稲田大学対慶應義塾大学の対抗ボートレースの様態であります。

このレガッタは、イギリスのオックスフォード大学対ケンブリッジ大学のテムズ川におけるザ・レガッタと称される有名な競技に倣いまして、これ200年の伝統があるわけではありますが、明治37年から行われるようになり、戦争中の中断をしていた数年を挟みまして、何万人という見物客を、毎年3月末ないし4月の初めのちょうど桜のころに、応援団で大変な見物客の方々を含めて、にぎわいを見せております。

東京浅草は両国橋から桜橋に至る3,000メートル、この隅田川が兩岸に鈴なりの見物客でもってにぎわうという東京の恒例行事でございまして。

私がこの早慶レガッタに興味を持ちましたきっかけは、小学校6年生の国語の教科書で読んだ、あらしのボートレースという一文であります。この教科書、私の同世代の近い方であると、恐らく皆さん多分御記憶だろうと思えます。

このあらしのボートレースという文章はですね、ちょっと概略を申し上げますと、昭和32年に行われました第26回早慶ボートレース、早慶レガッタの様態を描いたものでございました。実話でございまして。

この日は大変な風雨の中のレースとなりました。優勝確実と目されておりました慶應の船、慶應艇が雨と波による浸水で結局はゴール寸前でもって沈没してしまったと。これに対して早稲田の船は、これはあらかじめ準備をしたことによりまして、クルーの何人かが船の中に入ってきた水をかき出して、こぐのをやめてかき出すことと分担をしましてですね沈没を免れて、結局は早稲田艇のみがゴールしたと。

さて、この結果、早稲田クルーは大喜びをすと思いきや、これは真の勝利とは言えないということで、本当に実力を出すような環境のもとで再試合をしてほしいと、こういうふうに申し出たわけでありませ。これに対して慶應クルーはですね、敗れた慶應クルーのほうは、レースというものは試合の状況に対するさまざまな準備を含めての勝敗であり、今回の早稲田の勝利には揺るぎはないということで心からの拍手を送ったという、スポーツマンシップ、大学スポーツのスポーツマンシップの物語でございます。

こうしてですね、私ごとになりますが、このレガッタというものに対して憧れました私は、昭和44年、旭丘高校のボート部に入部することになりました。当時、練習の場でありましたのは中川運河でございます。名古屋港管理組合が管理する中川運河がその練習の場であり、私は毎日ですね、古出来町の高校から授業が終わるや否や、当時の市電やバスを乗り継いで中川運河の河口近くにありました艇庫に駆けつけて、練習に明け暮れておったわけでありませ。

当時の中川運河はですね、まだ貨物船が大きな波を立てて頻繁に往来しておりました。ちょうどこの40年代の前半が変わり目でありまして、急激に運河の、運輸としての貨物船やタンカーの、あるいは木材を引き船で引くというような利用は激減しつつあるところでありましたが、まだ当時は相当船が往来しておりまして、これを縫う形で私どもは練習をしておったんです。

そして、ボートを入れる艇庫というものもですね、実は古い倉庫を借りたものでしかなく、電気も引いていなかったですし、したがって暗くなればもう真っ暗と、外の明かりだけが頼りというような状況で、雨漏りもするような施設でございました。

運河の水質もですね、非常に悪臭を放ち、私にとっては懐かしいにおいでもあるんですが悪臭を放ち、水質はとていい状況とは言えないという練習環境でありませ。

しかし、究極の団体競技とも言われるボート、これは実際に体験なさった方は多くないかもしれませんが、これは大変な魅力のあるスポーツでありまして、私もその魅力に取りつかれて、結局この練習環境、厳しい練習環境ではありませけれどもボートに明け暮れた、そんな高校生の3年間を送ったわけでございます。

往時と比べますと、現在の中川運河のボート環境はまさに隔世の感がございませ。平成5年に、関係者の熱心な要望が実りまして、当名古屋港管理組合によりまして名古屋港漕艇センターがいろは橋の西岸側に整備をされました。そして、いろは橋というすてきな橋がかけられて、そしてまた、いろは橋が橋脚のない橋としてボートレースの環境にも配慮した形の橋になりました。そして、東海橋も橋脚のない橋にかけかえていただいております。

東海橋の上にはですね、お渡りになった方はわかると思ひませ、ちょう

ど橋の中央部にですね、人がたまって運河のほうを眺めるような、人のたまりがあります、つくってあります。これは、ボートレース等運河の模様を橋の中央部にとどまって見るためのこれはステージであります。そんなものも施されて見違えるような、ここは名古屋における、市内においては唯一のボートが練習でき、そしてレースが実施できる場所となったわけであります。

運河橋との両岸は、中川口緑地としまして非常にすてきな緑地として整備され、ベンチ等も整えられております。運河の水質も、40年前に比べますと飛躍的に向上したと私も感じております。

こうした中で、秋の名古屋まつりの一環としての市民ボートレース、そして名古屋レガッタというようなものも回数を重ねて、年々その参加者も増えておるといふ盛況を呈しております。

こうした中川運河のボート競技の練習環境があったればこそ、旭丘高校ボート部の榊原春奈さんという女性選手が2012年のロンドンオリンピックのボート競技に出場することができたのであります。

日本ではまだまだマイナーなスポーツと見られがちなボート競技でありますけれども、欧米の諸都市へ参りますと非常に大勢の観客がにぎわい、老若男女幅広い世代の方々がこのボートという競技に接して楽しんでおられます。

冒頭に紹介しました隅田川の早慶レガッタのような伝統が、この名古屋の地にも定着することができたならば。といたしますのは、実はこの早慶レガッタに匹敵するような伝統的なレースが、名阪戦というのがございまして、名古屋大学と大阪大学のボート部が、毎年ではないんですけれども、既にもう70回近い回数を重ねて、しかもこれが30何勝対30何敗というような非常に拮抗する形で、好レースが展開されながら回数を重ねてきております。

しかし、このレースは2,000メートルを要しますので、庄内川とか愛知池とかを使って大阪と交互にやられておるわけでありましてけれども(注：中川運河でも開催実績あり)、これはまさにこの名古屋のど真ん中、中川運河を舞台に開催されるようなことになれば、大阪は例えば中之島でやるとか、これは新しい大阪と名古屋の風物詩として定着をして人気を博する可能性が大いにあると思うわけでありまして。(注：旭丘高校と津高校の対抗戦はすでにマスコミでも紹介)

これから名古屋市も愛知県も、にぎわいのある名古屋、魅力のある町名古屋をつくろうということできざまな努力がなされております中でありますだけに、このボート競技の持っている潜在的な可能性、そしてその人気、このスポーツとしての振興の伸びしろというものにぜひ着目をしてですね、この中川運河を舞台にしたところのボート競技の振興のためにぜひ、管理者である名古屋港管理組合、そして名古屋市のほうに御努力をいただきたいと心から願うものでございます。

そんな期待を込めまして、4点にわたってお伺いしてまいります。

まず第1点は、この今申し上げましたボートを含めまして、名古屋港全体ではですねさまざまな水上スポーツが利用されております。ボートとかディングーヨットとか、あるいはカッターとか、その他いろいろございますが、どのような利用状況になっておりますか。概括的にお示しをください。

2番目として、平成24年には、名古屋市と名古屋港管理組合を中心に、今後20年を見据えた中川運河再生計画というものがまとめられております。これは幅広いボート関係者を含めた皆さんの意見を聞く中でまとめ上げられたもので、私も大変高く評価しておりますが、この中ではボートなどの水上スポーツの位置づけがどのようになっておるのか改めて御紹介させていただきたいと思っております。

3番目といたしまして、先ほども触れました運河における水上スポーツ、ボート競技の拠点としての名古屋港漕艇センター、平成5年にこれが開設に至った経緯と現在までの利用状況、そして運用の実態はどのようになっているか、お答えをいただきたいと思っております。

最後に4番目としましてですね、この漕艇センターは運営協議会がございまして、そのボート競技の関係者等からも次のような要望事項が管理組合や名古屋市に対して寄せられておると伺っております。それは、おおむね次の3点に集約できると思っておりますので、それぞれについてどのように取り組んでこられたのか、あるいは今後取り組んでいかれるのか、お答えをいただきたいと思っております。

その1点はですね、まずこの10月から運航が、まだモニタリング運航ということですが、運航が開始されました中川運河から金城ふ頭までガーデンふ頭を経由して運航が始まりました水上交通ですね、クルーズ名古屋というまことにカラフルな船が、休日を中心にですが、中川運河の景色に彩りも添えるようになりました。

しかし、これとですね、土日を中心にやはり特に下流部、レクリエーションゾーンとされたエリアではボート競技の練習も、やはり学生、社会人の方々は休日ということになりますので、この水上交通とこのボート競技の練習や試合とをうまく共存させていき、クルーズが楽しむ風景の一つとして、早慶レガッタではありませんが、ボートが行われておる練習風景が運河の光景の一つとして楽しんでいただけると、そういう共存や安全の配慮、必要だと思っておりますが、これについてどのような手が打たれてきたのかということをございます。

2番目の問題はですね、東海橋は、先ほど申し上げましたように橋脚のない橋として10数年前にかけかえが行われました。そして、このレースをやります場合には、いろは橋から東海橋、そしてそのさらに上にございます国道1号線の昭和橋。この国道1号線の橋から下流部はまさにレースに適した、幅も十

分あるし、区間となるわけではありますが、その実は真ん中にですね名古屋市の水道局が設置しております水道橋という橋がございまして、水道管が運河をまたいでいるわけではありますが、そこに3本の橋脚が立っております、これが実はですねレースをやる上でちょっと障害になると、危険でもあるということ、そしてまた、見るところですねこの水道橋もかなり老朽化しておるといこともございまして、これがかけかえられるような際にはですね、ぜひともいろは橋や東海橋と同じように橋脚のない無橋脚の橋にしたいと、こういう要望でございます。

こういうことも含めまして、ボートレースを実施するにはさまざまな環境整備がまだまだ必要な点がございまして、その最大のものがこの水道橋の無橋脚化というものでございます。これについてのお考え、お聞かせいただきたいと思っております。

それから、3番目はですね、名古屋港漕艇センター、これも先ほど申し述べましたように、平成5年でありますからもう20年以上経過いたしまして、相当老朽化しております。そして、利用者も大変増えておりますので、狭隘化の問題も出てきております。これを有効に活用しながら、これをさらに大勢の人に利用してもらえようような対策、そして老朽化に対してどう改修を施していくのかという問題もございます。

この大きく3点のポイントについてですね、名古屋港管理組合関係局のお考え、そして管理者としての、私がるる申し上げてまいりました水上スポーツ、名古屋港、名古屋のにぎわいの重要な一環を成す可能性を秘めたこの振興のためにお考えをお示しいただきたいということをお願いして、壇上からの第1問とさせていただきます。

どうぞ誠意ある御答弁をよろしくお願いいたします。

●港営部長

名古屋港における水上スポーツの振興についてお答えいたします。

まず1点目の、名古屋港全体における水上スポーツの利用状況についてでございます。

名古屋港における水上スポーツにつきましては、レガッタ、カッター及びヨットの競技及び訓練が、それぞれ名古屋港漕艇センター、名古屋港海洋トレーニングセンター及び名古屋港少年少女ヨットトレーニングセンターを拠点として、各施設の運営協議会により行われております。

昨年度の競技及び訓練の実績といたしましては、レガッタが中川運河の水域において287回、カッターが荒子川南側の水域において26回、ヨットがガーデンふ頭南側及び西側水域において120回となっております。そのほか、ボードセイリング大会がガーデンふ頭南側水域において、ドラゴンボートレース大会が中川運河の水域において、各1回行われております。

私からは以上でございます。

●総合開発担当部長

引き続き2点目の、中川運河再生計画におけるボートなど水上スポーツの位置づけについてお答えいたします。

中川運河再生計画におきましては、おおむね20年先を見据えた再生構想として、水上スポーツの場としての魅力を高めるため、関連施設の拡充や活動エリアの拡大など水上スポーツ機能の拡充に向けた環境整備を進めてまいります。

特に運河下流部のレクリエーションゾーンにおきましては、名古屋港漕艇センターを中心とする水上スポーツのさらなる活性化などにより、水と緑のレクリエーションフィールドの形成を目指すこととなっております。

以上でございます。

●関連事業担当部長

引き続き3点目の、名古屋港漕艇センターが開設された経緯、現在までの利用状況、運用実態についてお答えいたします。

中川運河には、名古屋港管理組合が設立される以前から、名古屋市が設置を許可した漕艇、ボート用の艇庫がありました。しかし、同施設は老朽化が著しく、また漕艇関係者から、水面を開放し、市民のための漕艇場設置の要望がありました。

このため、本組合は、漕艇競技を通じてスポーツマンシップを養うとともに、海事思想の普及を図るため、平成5年4月、港区中川本町に約1億9,000万円の総事業費で名古屋港漕艇センターを新設いたしました。

同センターは、鉄骨2階建て延べ床面積約886平方メートルで、1階は50艇を収容できる艇庫及び倉庫、2階は研修室、更衣室、シャワー室などを備えております。

また、当施設は、本組合、名古屋市ボート協会等で構成する名古屋港漕艇センター運営協議会により管理運営されております。

利用者数は、平成19年度は約6,000名でありましたが、近年では約1.5倍の約9,000名となっており、漕艇競技の普及と競技力の向上に寄与しております。

私からは以上でございます。

●総合開発担当部長

引き続き、運航が開始された水上交通、クルーズ名古屋との共存、安全配慮についてお答えいたします。

中川運河における水上交通、クルーズ名古屋につきましては、ささしまライブ24地区のまちびらきにあわせまして、10月8日から土日祝日で運航しており、今後、学校休業日も含め運航する予定でございます。

水上交通の運航に先立ちまして、10月3日には、法令遵守はもとより、徐行

運転や離隔距離を確保することなどを取りまとめた確認事項を、名古屋港漕艇センター運営協議会を初め、ボート競技者や中川運河内を運航している事業者に了承を得ております。また、10月5日には、ボート練習時において、実際のクルーズ船を用いた走航確認を行っております。

クルーズ名古屋の運航に際しましては、ボート等の水面利用者に十分配慮しながら航行しております。本組合といたしましては、今後とも、共存、安全配慮に努めつつ、広大な水辺空間の魅力や水上交通の楽しさを広めていきたいと考えております。

次に、東海橋北部の水道橋の無橋脚化など、ボートレース環境の改善・整備についてお答えいたします。

水道橋の無橋脚化などボートレース環境の改善・整備としましては、ボート競技関係者から、中川運河は運河幅が狭いため国際大会の公認レースは実施できないが、橋脚が撤去され2,000メートルのコースができれば、練習環境の向上や非公式レースの開催が考えられるため、その実現については中長期的な課題であると認識していると伺っております。

本組合といたしましては、今後とも、関係者の意見を伺いながら、水道橋の無橋脚化や移設について名古屋市とともに検討してまいります。

私からは以上でございます。

●関連事業担当部長

引き続き、名古屋港漕艇センターの狭隘化、老朽化対策についてお答えいたします。

名古屋港漕艇センター運営協議会事務局より、増加した施設利用者に対応するため隣接地の拡張利用について要望があり、本組合としても必要性を鑑み、当事務局と意見交換しながら取り組みを進めております。

また、当施設は設置から約25年経過しており、老朽化した箇所が見られたことから、本組合において近年、照明設備やシャッターの修繕のほか、外壁補修工事を行うなど必要な対応を図っております。

今後につきましても、当事務局と十分に意見交換しながら、利用者ニーズに適切に対応してまいります。

以上でございます。

◎高木ひろし議員 再質問

各点につきまして、御答弁をいただきましてありがとうございました。

本当にですね、ボート関係者の一人として私自身、そして以前の中川運河を知る者として、本当にこの間、運河の周辺整備や漕艇センターの設置について、管理組合の皆さん、そして名古屋市の関係者の方々の御努力に対して本当に心から敬意を表するものでございます。

そこで、先ほどの答弁について、さらに1点だけお伺いしたいと思います。

今日は管理者として市長もおみえでございませう。

この中川運河の再生計画、そして水上交通の活用ということは、名古屋市にとっても非常に重要な課題だと認識しております。

特に名古屋市ボート協会からも強く要望されているのが、昭和橋から東海橋、そしていろは橋と、この三つの橋をまたいでの2,000メートルのコース設定の上で、どうしても障害になります、隘路になりますのがこの水道橋でございまして、これは名古屋市水道局所管のものでもございませう。

私は何としてもですな、これ、すぐにとは申しませう。これ、ボートの都合でもって不必要なかけかえをやるなんてことはとんでもないことだと思ひますが、来るべき改修なりかけかえの際にはぜひ無橋脚でやってほしいという要望は、私は、中長期的な課題とおっしゃいましたけれども、もう一つですな、かけかえの際には考慮したいとかいうような踏み込んだお答えがいただけてもいいんじゃないかとひそかに期待しておりました。たまたま今日は管理者が市長になられたということでもございませうし、市長とは何かと、高校の同窓でもございませうし御縁がございませうので、ひとつこの点についてのお考えをお聞かせいただければありがたいと思ひまして、第2問といたしまし。

●管理者（名古屋市長）

なかなか結構優しい調子で聞かれとりますけど、役所もつれないことばっか言っとなつてですな。これ、はい何年になるかな、5、6年前に協会から要望書をいただいて。吉田さんじゃなかったですかあれ、ボート部の監督。元気にしとらさせるかね、あの人。あの人からも、あそこ行ってぜひつくってちょうよと。

皆さんそのときに聞いたのは、やっぱり中川運河って喫水が浅いからボートレースやるとものすごいよって、目の前行くのでということがありまして、5、6年前に実は内部で議論したんですわ。なら、ぐにゃぐにゃぐにゃぐにゃなりましてということでもございませうけど。

とにかく、6兆円も貿易黒字があるんでしょ、名古屋港これ。今年それを上回ると、6兆ですよ。輸出じゃないですよ、貿易黒字が。それに接続しとる三川ですな、中川運河、堀川、新堀川と。あれはまっどえりゃあおもしろいもんにはせないかんじゃないですか、ちゃんと投資をしてということ。

あんまり中身言っていかんけど、2日ばかり前に答弁の打ち合わせするじゃないですか。なら、その国際レースとか公認レースはできんというように、できないという話だったもんで、それおかしいんじゃないかと、そんなふうじゃなかったはずだぞ。僕が5、6年前に聞いたときは、国際A級というのはなかなか難しいと言っていましたわ。長良川河口堰の代替施設でつくったのがあるんですけど、その支度ならできるんじゃないかなということも言っとなつ

たで、違うじゃないかということで。昨日、今日になりまして、ほうだろ言って。

だから、とにかく役所にも指示しておりますけど、役所に言うとみんなペケになってまうもんでね、要は。だから僕が直接これボート協会も確認して、まあ一回在校の人も含めてだけど、一遍皆さんのやっぱり声を強めてもらわなканで、やっぱりこれ。

名古屋のかけがえのない一つの名所としてね、この喫水の浅いボートレース場を国際A級を目指してね2,000メートルのつくるんだったら。幅が狭いんだったら、そこ浚渫した場合にね、その場合。あとどういう問題があるとかいうことも含めて、きちっとやっぱりいろんな課題なりテーマを出しますのが早いところ。諦めんように、高木さんも強い気持ちで、そんな優しいこと言ってもらってはいかんですよ、そりゃ。強い気持ちで要望していただきたい。名古屋の名所にしよまいというの、本当に。ということでございます。